

(10) 小 結

古墳の特徴 調査の結果、郷ヶ平3号墳は全長22.3mの前方後円墳であることが判明した。埴輪をそなえるが、葺石は施されていない。後円部の直径は14.7m、前方部の幅は12.0m、周溝を含む全長は、26.0mである。周溝は緩やかな前方後円形を呈しているが、くびれ部は幅が若干広がっている。前方部や後円部にみられる周溝は幅が2.5mほどである。前方部の北西隅の外周には周溝の張り出しが認められ、祭祀空間が形成されていた可能性がある。

須恵器 周溝からは須恵器・土師器と埴輪が出土した。須恵器は陶邑系（湖西窯を含む）のものと在地系（有玉窯を含む）のものが含まれるが、概ねTK23型式期に位置づけられるものである。また、前方部北西外側には製作時期が新しい時期の須恵器が破砕された状態で出土した（SX01）。出土遺物の編年的位置はTK10型式期であり、郷ヶ平4号墳（前方後円墳）の築造時期と重なることは、追加儀礼の契機を探る上で示唆的である。

円筒埴輪 周溝から円筒埴輪が豊富に出土した。円筒埴輪は2条3段構成のもので、底部には環状の段差をもつ淡輪技法がみられる。円筒埴輪の第1段にはヨコハケをもつ一群ともたない一群が共存している。編年的位置についてもTK23型式期とみて矛盾はない。

形象埴輪 形象埴輪は前方部南側の周溝（E地区）から集中的に出土した。この部分には円筒埴輪の破片が認められないので、前方部南辺には円筒埴輪列がなく形象埴輪のみが樹立されていた可

能性が高い。形象埴輪には、馬、馬曳き、弾琴人物を含む男子、女子、家の各種が認められる。馬形埴輪は部材がほぼ完全に揃う資料として県内初の出土例である。弾琴人物に伴う琴も県内では初の出土例で、写実的な表現が注目できる。

築造時期 周溝から出土した須恵器と埴輪の編年観から導き出せるTK23型式期が、郷ヶ平3号墳の築造時期と捉えられる。暦年代で示せば西暦470年代から480年代頃を中心とする時期といえるだろう。

TK23型式期は、当地域にみられる淡輪技法の埴輪系列のなかでも、形象埴輪を豊富にもつ系譜が出現する画期に位置づけられ、郷ヶ平3号墳の事例は、その初源期に近い資料といえる。人物埴輪を伴う形象埴輪群が東日本の広域に拡散する時期にあたる点でも、近畿地方と東日本を繋ぐ位置にある本例の重要性は高いといえるだろう。（鈴木）

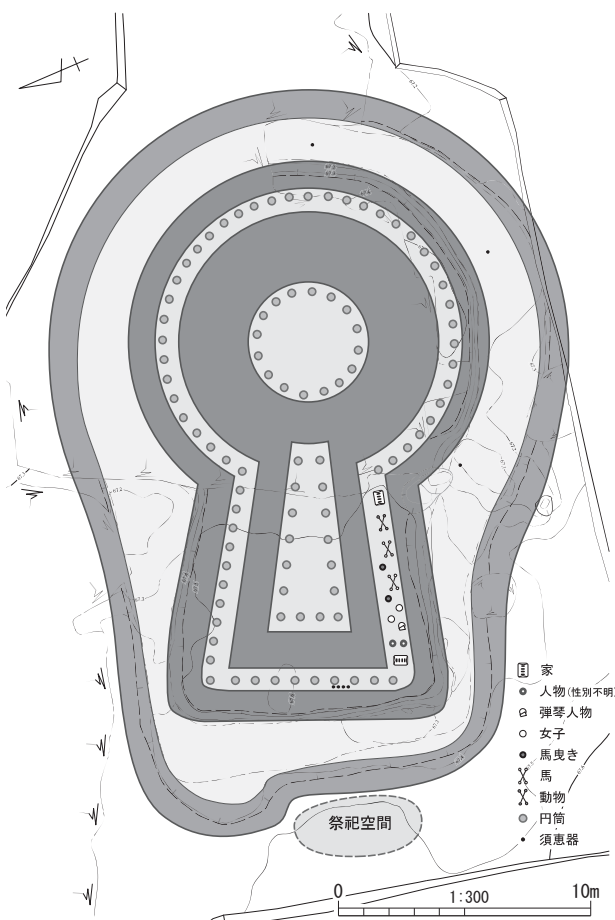


Fig.68 郷ヶ平3号墳墳丘復元図

第3章 後 論

1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義

(1) はじめに

郷ヶ平3号墳からは豊富な形象埴輪と淡輪技法をもつ円筒埴輪が出土し、当地域における埴輪製作技法の推移や生産体制を探る標識的な資料が得られた。淡輪技法とは繊維質の輪を底部に敷き円筒部を積み上げる手法であり、須恵器製作技法との強い関連をもつ。こうした技法をもつ埴輪は、伊勢や遠江に多く分布し、その本貫地と目される大阪府淡輪地域および和歌山県紀ノ川下流域との関連が指摘されている（川西 1977、坂・穂積 1989）。

淡輪技法の採用には自重による変形を防ぎ、底部の大きさを規格化する意図があったと想定されていた（鈴木 1990）。しかし、淡輪系埴輪における底部径の多様性は著しく、この技法は底部の大きさを規定しているとはみなしがたい。むしろ、成形時に使用する回転台からの離脱を容易にするために繊維質の輪が用いられたと解釈する方が理解しやすい（辻川 1997）。

三河・遠江地域では、淡輪系埴輪を出土する古墳が 20 基ほど認められ（Tab.2）、焼成した窯跡も確認されている。ここでは、当地域における淡輪系円筒埴輪の編年的位置づけを明確にした上で、形象埴輪を含めた三遠地域における淡輪系埴輪の実態とその推移について触れておきたい。

(2) 三遠地域における淡輪系円筒埴輪の変遷

分 類 当地域における淡輪系円筒埴輪については、1 次調整にイタナデを施すものとヨコハケを用いるものの 2 種に大きく分けられる。前者はⅠ類、後者はⅡ類とされており（鈴木敏 1990）、本稿でもこの分類を踏襲する。Ⅰ類、Ⅱ類ともに 2 次調整には基本的にヨコハケを用いるが、Ⅰ類には突帯上にもヨコハケが施されるものがある。ここでは、突帯上にヨコハケをもたない通有の製品をⅠ a 類に、突帯上にもヨコハケを施すものをⅠ b 類とする。また、Ⅰ類の中には 2 次調整にヨコハケを用いずナデ調整されるものがあるが、この一群をⅠ c 類としておきたい。Ⅰ b 類は突帯幅が広いものを多く含み、須恵器質焼成とも関連が深い。伝統的な円筒埴輪の形態や技法との乖離が顕著な点で、在地的な変容を示すとともに、須恵器焼成技法との関連を強く印象付ける。

Ⅱ類については、第 1 段に 2 次調整のヨコハケを施すものをⅡ a 類、施さないものをⅡ b 類、全体的に 2 次調整の省略が進んだものをⅡ c 類とする分類案（鈴木敏 1990）を援用する。大まかな変遷観としては、Ⅰ a 類・Ⅰ b 類→Ⅱ a 類→Ⅱ b 類→Ⅱ c 類とった推移が想定できるが、その細部については複数の報告者が指摘しているとおり、検討が必要である（白井・鈴木京 2004、栗原 2005）。

変遷観 Ⅰ類については、形態や技法が多様な千人塚古墳例が初源的な事例とみられる。千人塚古墳例には 4 条突帯 5 段構成（以下、4 条 5 段と略す）のものがふくまれ、Ⅰ a 類とⅠ c 類が認められる。また、突帯上にヨコハケを施さないものの、低平な突帯も認められ、Ⅰ b 類との関連が

Tab.2 三遠地域における淡輪系埴輪出土地

古墳名	所在地	墳形	規模	須恵器	円筒		形 象											
					構成	細分	男子	貴人 椅子 胡坐	彈琴	武人	馬 曳	力士	女子	動物			器財	
千人塚古墳	浜松市	造出付円墳	51	—	4条5段	I a, I c												
光明山古墳	浜松市	前方後円	82	—	—	I a, I b												
京見塚古墳	磐田市	円墳	47	TK208	2条3段	I a, I b												
京見塚窯 (明通窯跡)	磐田市	窯跡	—	—	2条3段	I a, I b												○
郷ヶ平3号墳	浜松市	前方後円	22	TK23	2条3段	II a, II b	○	(○)	○		○		○	○				○
一ノ宮古墳	湖西市	(前方後円)	15~20	(TK23)	2条3段	II a							○	○				
神内平1号墳	浜松市	前方後円	17	TK23~TK47	2条3段	II b	○	○				○	○	○		○	○	○
青塚古墳	幸田町	前方後円	36	—	不明	不明	(○)						(○)			○		
二子塚古墳	磐田市	前方後円	55	TK47	2条3段、3条4段	II a	○				○		○	○	○			○
後山13号墳	磐田市	不明	—	—	不明	II a							○					
辺田平1号墳	浜松市	前方後円	20	H11 (TK47)	2条3段	II a	○	○		○			○	○		○		
念仏塚5号墳	豊川市	前方後円	不明	—	不明	II a, II b	○	○		○		○	○					
数谷原古墳	豊川市	不明	不明	—	不明	不明							○	○				
峠場窯跡	湖西市	窯跡	—	MT15	2条3段	II a, II b							○	○				○
古村積神社古墳	岡崎市	前方後円	31	MT15	3条4段	II b	○	○		○	○		○	○		○	○	○
権現平山6号墳	浜松市	前方後円	15~20	—	2条3段	II b												
江古山2号墳	豊田市	方墳	9	H10 (MT15)	2条3段	II b												
江古山4号墳	豊田市	方墳	11	H10 (MT15)	2条3段	II b												
伊保遺跡	豊田市	古墳か	—	—	不明	(II b)												
稲荷塚古墳	豊田市	不明	—	—	不明	(II b)												
亀塚古墳	浜松市	前方後円	21	TK10	不明	II c												

うかがえる。副葬品が示す古墳の編年の位置は TK73 型式期に中心があり、その下限は TK216 型式期である。光明山古墳例は千人塚古墳例よりも粗いヨコハケが顕著なもので、突帯上にもヨコハケをめぐらす I b 類を主体とする。I b 類の特徴は、先行する磐田市堂山 2 号墳の石見形埴輪などにも看取でき、天竜川東岸域の地域的特性と捉えられる（鈴木敏 1990）。光明山古墳例には、僅かながらタタキの痕跡をとどめるものがあり、淡輪技法と須恵器生産技術との関連を明確に伝える点で初現的な時期に位置づけてよい。これら 2 例の帰属時期は、TK73 型式期に遡る可能性があるが、後続例との時間的開きを考慮すると、TK216 型式期に位置づけておくのが妥当であろう。京見塚古墳例は I b 類を主体とし、2 条 3 段構成に統一されている。後出する II 類との形態的な類似性が高く、I 類の新相期に位置づけてよい

だろう。この古墳からは TK208 型式期の須恵器が出土している。

I 類に続いて成立した II 類は、2 条 3 段構成という統一的な形態規範がある。同時期の尾張地域でも同じ段構成の埴輪が盛行するので、2 条 3 段構成の埴輪は、東海地方の広範囲に受容される形態と評価してよいだろう。II a 類と II b 類の関係は時期差と評価されてきたが、郷ヶ平 3 号墳では、両者が共伴し、同時期に並存することが明確になった。その時期は、出土須恵器が示す TK23 型

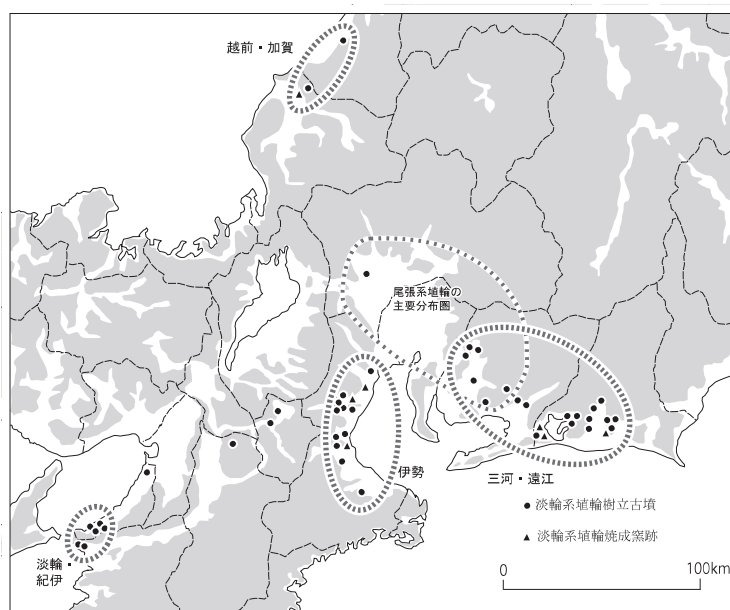


Fig.69 淡輪系埴輪の分布

西暦	須 恵 器	円 筒 埴 輪	特記事項
425	(TK73)	I a	淡輪技法の導入
450	TK216	I b I c	
		千人塚 光明山 タタキ 千人塚	
	TK208	I b	2条3段構成の確立
		京見塚 京見塚 京見塚 京見塚	
475	TK23	II a II b	II 類の成立
		明通り窯 郷ヶ平3号 一ノ宮 郷ヶ平3号 明通り窯 郷ヶ平3号	人物・動物埴輪の本格導入
500	H11	II a II b	II a 類と II b 類の並立
	TK47	【3条4段】	
		神内平1号 二子塚 辺田平1号 二子塚 神内平1号	第1段ヨコハケの盛行
	H10	II b	第1段ヨコハケの衰退
	MT15	【3条4段】	
		江古山3号 江古山4号 古村横神社 峠場窯 江古山4号 権現平山6号 峠場窯 古村横神社	
525	TK10	II c	2次調整ヨコハケの衰退
		0 1:10 20cm 亀塚 0 1:15 20cm 亀塚	

Fig.70 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷

1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義

式期といえ、Ⅱ類の出現期に相当する。TK23 型式段階の須恵器を焼成した湖西市明通り窯跡から出土した円筒埴輪（淡輪系埴輪の可能性が高い）も第1段にヨコハケをもたないⅡb類とみられる。これらの事例が示すように、Ⅱ類の出現期（TK23 型式期）からⅡa類とⅡb類は並存するとみてよいだろう。

第1段の外周ヨコハケ調整は、畿内の円筒埴輪でも省略される事例が認められ、当地域においても浜松市狐塚古墳（TK73 型式期、鈴木一2012）において、第1段の外周ヨコハケ調整を省略した円筒埴輪が確認されている。第1段の外周調整の有無は、変遷の傾向を掴む属性として有効であるが、編年の位置付けの絶対的な指標となりにくい。

古墳に伴う須恵器の編年観を通じて整理するなら、第1段にヨコハケを施すⅡa類は、Ⅱ類の出現期（TK23 型式期）から TK47 型式期にかけて存続し、つづく MT15 型式期には峠場窯例を最後に急速に衰退すると捉えられる。いっぽう、第1段のヨコハケを省略するⅡb類は、Ⅱ類の出現期からⅡa類と並存し、MT15 型式期まで残存すると考えられる。2次ヨコハケの省略傾向が著しいⅡc類は該当例が亀塚古墳の1例のみであり、MT15～TK10 型式期に中心があるとする見解（鈴木敏1990）以上の所見を持ち合わせない。

なお、Ⅱ類の中には3条4段構成のものが二子塚古墳と古村積神社古墳に認められる。新しい時期における変容形態と捉えることもできようが、前者は全長55m、後者は全長31mと墳丘規模が大きいことから、3条4段構成の埴輪は、階層差が示されている可能性がある。

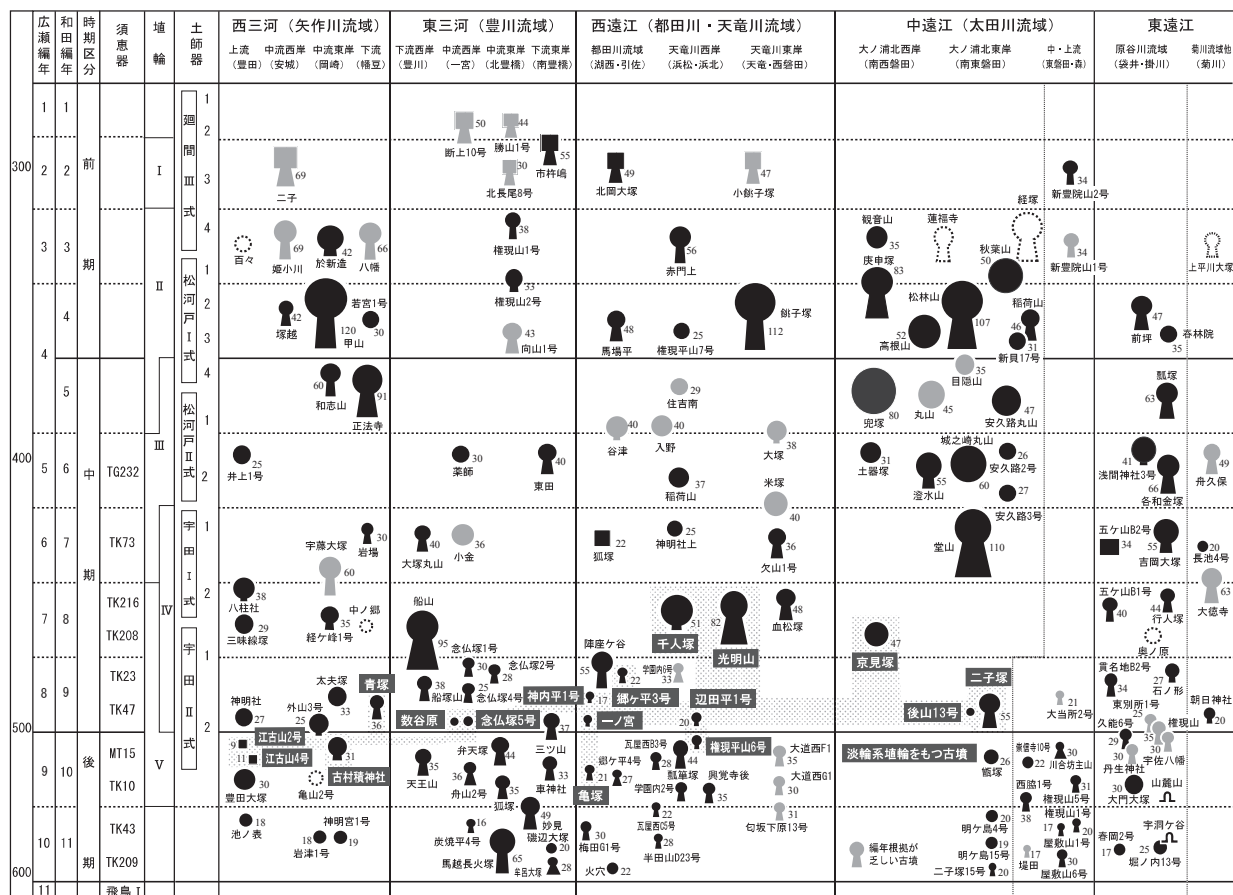


Fig.71 三遠地域における古墳の変遷

(3) 形象埴輪の特徴と変遷観

淡輪系円筒埴輪の出現期にあたるⅠ類は、京見塚古墳で僅かな蓋形埴輪が知られる程度で、形象埴輪が伴うことが極めて少ない。Ⅰ類は円筒埴輪生産に特化している段階の所産と判断できよう。いっぽう淡輪系埴輪Ⅱ類には、形象埴輪を伴うものが大半を占める。Ⅱ類導入以前の資料群と比べると、形象埴輪の充実ぶりは明確であり、大量の形象埴輪導入とⅡ類の淡輪系円筒埴輪の出現は帰一の事象と捉えられる。Ⅱ類の成立の背景には外来的な要因を大きく見積もるのが妥当であろう。

この時期の形象埴輪には円筒形の基部をもつものがある。基部が判明するものはすべて淡輪技法で製作されている。焼成や色調、胎土などの特徴も円筒埴輪と形象埴輪はほぼ共通するので、双方とも同一の工人集団が製作にかかわったと理解できる。Ⅱ類の円筒埴輪と共伴する形象埴輪を、底部技法が確認できない事例を含め「淡輪系」と呼称する所以である。

Ⅱ類の淡輪系形象埴輪には、技法上、特筆すべき技法や特徴が看取できる。以下、先行研究（鈴木徹1997、白井・鈴木京2004）に導かれながら、その一部を紹介しておきたい。

端部詰め込み技法 人物埴輪の腕や足、動物埴輪の頭部などの接合には、端部をしぼった本体部分に外側から詰め込むようにして部品を継ぎ足す技法が多くみられる。こうした技法を「端部詰め込み技法」と呼ぶ。馬形埴輪の頭部の接合にもこの技法が採用されており、内面に口縁状の端部が大きく残存している。人物埴輪の腕にみられる詰め込み端部の形状には、中空にしているものと端部を閉塞しているものがある。前者が古相、後者が新相の特徴とみられる。新相の閉塞技法がみられる資料として神内平1号墳例、二子塚古墳例、古村積神社古墳例があげられる。

芯部巻き付け技法 人物埴輪の腕や鶏の頭部など中空の部位を製作する際には、粘土を棒状の芯に巻きつけて製作する技法（芯部巻き付け技法）がみられる（白井・鈴木京2004）。この技法は馬形埴輪の尻尾にも援用されており、細部に至るまで中空に造り上げる明確な意図がうかがえる。

差し出す腕 男子、女子ともに腕は前方に差し出す表現が多くみられる。女子の場合は両手を合わせて容器を捧げる表現が多用され、給仕する人物が表されている。いっぽう男子埴輪においても、腕は前方に差し出したものも多く見られる。片腕を上げる所作をとることが多い馬曳き埴輪においても、淡輪系埴輪においては腕を前方に差し出す形態が多数を占めていると想定できよう。

男子埴輪の表現 男子埴輪の頭部は、粘土紐の巻上げによって頭頂部を閉塞し、被り物や頭髮が添付されている。また口の開口が小さく、緩やかなU字形を描く。被り物は鉢巻状に表現されるも



Fig.72 三遠地域の淡輪系形象埴輪にみる製作技法の特徴

のが多く、三角文の線刻が施される。頭髮の表現としては、左右に下げ美豆良がみられ、後頭部は垂髪がみられる。後頭部の垂髪は、左右に掻き分けた髪より上に表現されるという共通性もみられる。鉢巻状の被り物をもち、下げ美豆良を結う男子埴輪は馬曳きを表現したものが含まれる可能性が高い。郷ヶ平3号墳から出土した馬曳きも、同種のものといえる。

女子埴輪の表現 女子埴輪の頭部は比較的大きな円形粘土板によって閉塞したのち、髷が添付されている。髷は板状粘土を前後から折り曲げ、中空に表現され、実際の髪型に近い表現を志向している。髷の粘土板は、1) 上下二枚の粘土板を折り曲げるもの、から、2) 前後の端部のみを巻き込むもの、3) 上下の粘土板を張り合わせて一枚の板にするもの、といった差異があり、1) から3) の順に各技法が出現するものと捉えられる。女子埴輪も顔面が遺存する事例は少ないが、男子埴輪と比べると、口の開口は大きい（白井・鈴木京2004）。女子埴輪に多くみられる袈裟状衣には、羽状刺突が入れられた2条の横位突帯がみられる。さらに、背中には突帯による襷掛け表現がみられる点でも共通性が高い（鈴木徹1997）。また、女子埴輪には、両足をそなえるものがあること、容器を捧げもつ表現が多用されることなども特徴としてあげられる。

馬形埴輪 淡輪系の馬形埴輪は面繫、胸繫、尻繫の三繫を表現した飾り馬が表現されている。裸馬や飾りが省略された事例はみられない。馬形埴輪には轡が遺存するものが少なく不明確であったが、郷ヶ平3号墳例によって、鈴付きの楕円形鏡板をもつことが判明した。轡は新しい時期になるとf字形に表現される可能性が高い。面繫の後頭部にまわされた帯は、耳の付け根を縁取るようにめぐり額の帯と連結している。この繫ぎ方は実物と異なるが、淡輪系馬形埴輪に共通する表現である。面繫の交差部には辻金具が表現される場合と省略される場合がある。前者が古相、後者が新相とみられる。手綱は前輪の前方で収束し、端部は二本の粘土棒を振じって上方に突出させている。

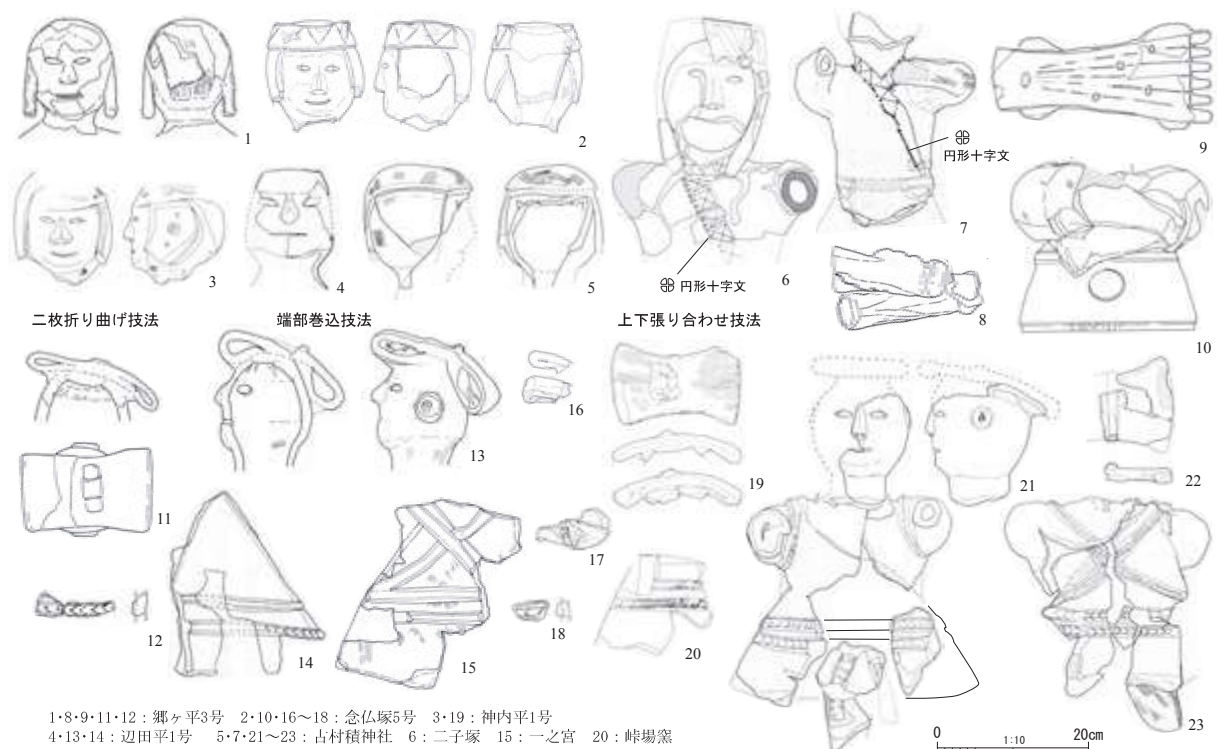


Fig.73 三遠地域における淡輪系人物埴輪の諸例

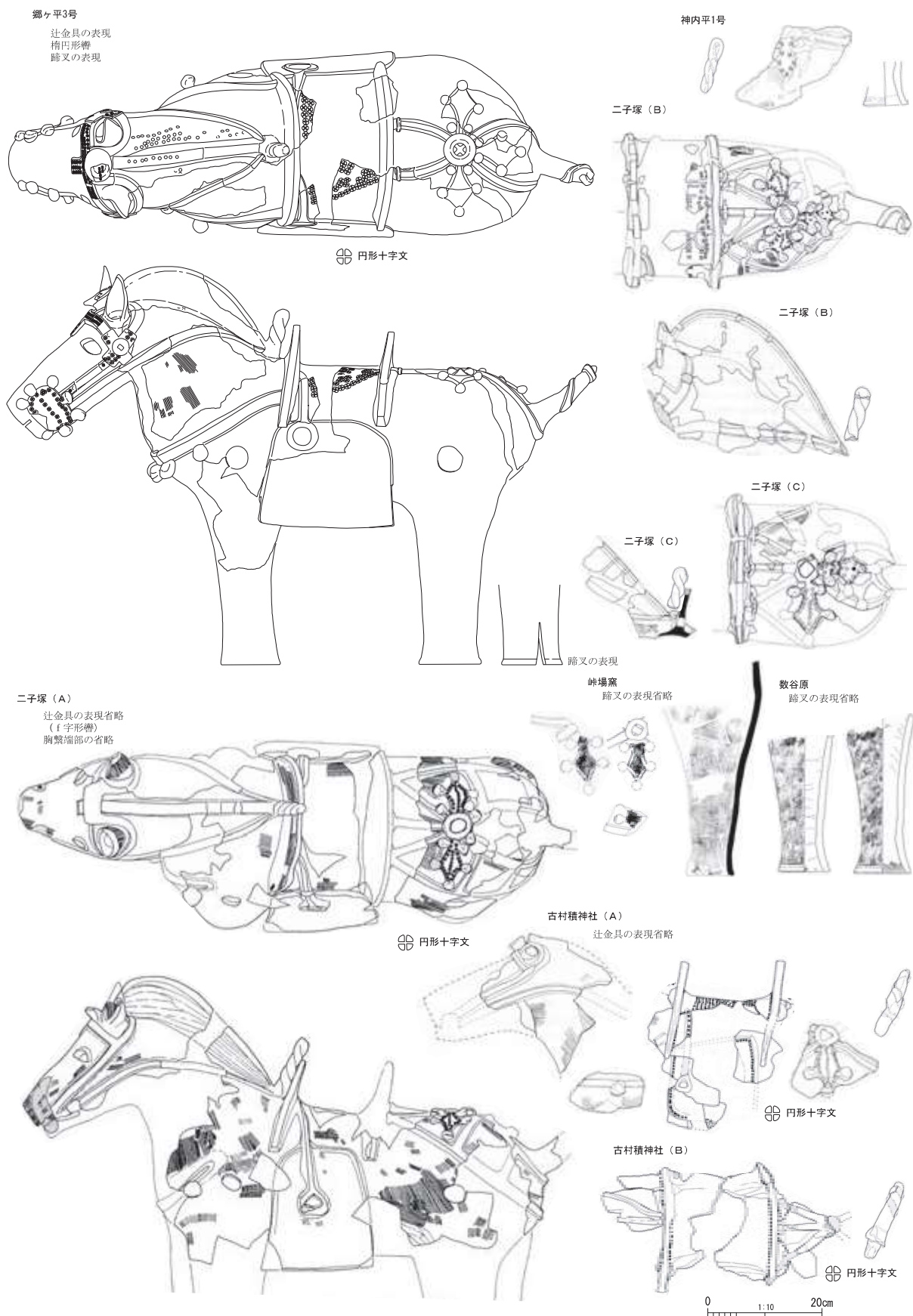


Fig.74 三遠地域における淡輪系馬形埴輪の諸例

胸繫には馬鈴が、尻繫には環状雲珠を介して五鈴杏葉が3方向に垂下されている。五鈴杏葉の表面には刺突文が施されることが多い。後輪の鞍との連結部には貢金具状の小粘土帯が添付される。

脚部は緩やかな曲線を描き、端部が外反する形態をなす。郷ヶ平3号埴例のように、蹄叉の切り込みがみられるものがある。切り込みがあるものが古く、新しい時期になると蹄叉の表現がなくなると想定できる。

円形十字文 淡輪系馬形埴輪には、円形十字文と円形文（竹管文）が多用されることも特徴である。円形十字文は面繫や轡、杏葉などの表面のほか、鞍褥を示す表現としても用いられている。円形十字文は大きさに差異が見られることが多く、報告で述べたとおり郷ヶ平3号埴例では3種の工具が用いられている（Fig.56）。

また、人物埴輪にも円形十字文が施された資料が散見できる。衣服の合わせ目に線刻で交差文が施され、その内側に円形十字文がみられる資料が二子塚古墳例と古村積神社古墳例にある。これらの男子埴輪は、馬曳きである可能性が高く、この想定が正しいとすれば、円形十字文は馬もしくは馬にかかわる人物に重点的に用いられる模様と評価できる。

鹿形・猪形・犬形埴輪 辺田平1号埴例には見返りの鹿が知られ、その他の古墳からも猪や犬などが多く出土している。辺田平1号埴には、弓に矢をつがえた写実的な狩人を象った埴輪もある。狩猟風景が表現された資料が一定量認められることは当地域の淡輪系形象埴輪の特色であろう。

家形・蓋形埴輪 家形埴輪は軸部に比べて屋根が高いもので、円柱状の堅魚木が乗ることが多い。線刻などが施されることがあるが、あまり大型のものは知られない。蓋形埴輪も立ち飾りの省略傾向が顕著である。また、盾形埴輪、鞍形埴輪、石見形埴輪などは、存在しないか、あったとしても多くは製作されなかったとみられる。

（4）形象埴輪祭祀の拡散と淡輪系埴輪

Ⅱ類の製作地 上述のとおり、三遠地域における人物・動物埴輪は、淡輪系円筒埴輪Ⅱ類の出現と同時に本格的に導入された。その分布域は静岡県磐田市から愛知県豊田市までの半径50kmほどの範囲で、中心は郷ヶ平古墳群が含まれる西遠江地域である。主要な生産地は湖西窯とみられ、製作工人は須恵器製作工人と同一か、彼らと極めて強い関係をもっていた人びととみられる。

淡輪系埴輪Ⅱ類の製品は、円筒埴輪、形象埴輪ともに、5世紀後葉から6世紀初頭（TK23～MT15型式期）までの一定期間の存続時期が見込まれるにもかかわらず、斉一性が極めて強い。こうした特徴から、Ⅱ類の製作工人集団は、限定的でかつ専門的であったことがうかがえる。湖西窯の製品供給を恒常的に受けた天竜川以西の西遠地域では、淡輪系埴輪が排他的に採用された。天竜川より東に位置する首長墓、二子塚古墳にも淡輪系埴輪が供給されているので、西遠江における淡輪系埴輪Ⅱ類の生産、流通には、伝統的な磐田原台地の最有力首長も関与していたことが分かる。

いっぽう、同時期の愛知県東部では在来的な技法をもった三河系埴輪が多く分布し、西三河では尾張系埴輪の影響も濃厚にみられる。当地における淡輪系埴輪は、点的な分布にとどまり、地域の中に根ざした技術系譜とはみなしがたい。三河における淡輪系埴輪は、製品が湖西窯から運ばれたか、工人集団が限定的に移動して製作したものと評価できる。また、江古山古墳群など豊田市の